

## 劇場と街がひとつになったイベントで、子どもを、人を、社会を元気にしていく。

世田谷パブリックシアターを運営する公益財団法人せたがや文化財団では、地元に着した劇場を目指し、子どもたちの健全育成と地域の活性化を図るため、読み聞かせの会「お話し森」と「三茶de大道芸」と題した2つの催し物を開催し、地元三軒茶屋の新しい風物詩として定着し始めている。

### 劇的な演出を加えた「読み聞かせ」で子どもたちを魅了。

「お話し森」は2011年7月9日と10日の2日間、世田谷パブリックシアターのシアターラムで開催された。前年度に続く2回目の公演で、毎回著名人によるお話の読み聞かせが行われる。

今年は俳優の小林顕作さんと、ミュージシャンのROLLYさんが読み手となった。二人とも読み聞かせを行う本選びから参画し、それぞれ7作品を読んだ。

小林さんはNHKの教育番組に出演していることもあり、子どもの扱いには慣れていて、前振りからあつという間に子どもの気持ちをつかんだ。一方のROLLYさんはあ

やしげなメイクで登場し、最初はこわごわと見ていた子どもたちを、ギターなどを用いた音楽性豊かな演出を駆使して虜にしていた。劇場らしく映像や照明、音響など文字通り劇的な構成で、幼稚園などでの読み聞かせとはひと味もふた味も違う。それでいて、子どもたちが少しくらい騒いでもおかまいなしという自由さがあり、遊園地のような空間を作り出している。会場を埋め尽くした子どもたちの反応がダイレクトに返ってくるので、出演者やスタッフにとっても気持ちのいい公演になっている。

世田谷パブリックシアター 劇場部長 榎屋一之さんは、この企画の目的について次のように語る。

「子どもに劇場に親しんでもらうこと、そしてここで体験したことを家族でも話し合うなどして、関係づくりに役立てて欲しいのです。劇場はテレビとは異なる生の関係を作れる場所。ただ見る、見せるのとは違う体験ができるのです」

終わったあとには、ロビーでスタッフたちからかき氷が振る舞われる。親子だけではなく、友だちとその親も加わって、コミュニケーションの輪が広がっていった。



「三茶 de 大道芸」は国内外から集まった約50組の大道芸人が集まった



小林顕作さんによる読み聞かせの様子

### 17万人を動員する三軒茶屋の新たな風物詩。

一方の世田谷アートタウン2011「三茶de大道芸」は、今年が15回目と歴史を刻みつつある企画である。開催日の2011年10月15日と16日は、三軒茶屋の周辺にたこ焼き屋やフリーマーケットなどの露店が立ち並び、通りはもちろん、どこに行っても大道芸に出くわすという様相となった。国内外から集まった大道芸人たちは約50組。フランス、イギリス、カナダ、中国からも一流のパフォーマーがやってきた。固定の10会場のほか、街を移動しながらパントマイムやジャグリング、アクロバットなどさまざまな芸が繰り広げられている。



「お話し森」を開催した会場



地元の商店街も積極的に参加しお祭りを盛り上げている

### 担当者より



誰もが日常を離れ  
楽しめるイベントに  
なりました。

公益財団法人せたがや文化財団  
劇場部長  
榎屋一之さん

子どもは普段は興業を行っていますが、お祭りというのは誰もが参加できることに意義があり、基本的な部分は無料、低料金でなければ成り立ちません。今回もAJOSCの助成によって、多くの方が日常を離れ、楽しんでいただいたことをご報告するとともに心より感謝申し上げます。

このイベントの仕掛け人はせたがや文化財団だが、今では地元の商店街が積極的に参加し、街をあげてのお祭りとなっている。同財団で制作を担当する酒井淳美さんは「初日の午前中が雨にもかかわらず、2日間で17万5000人の来場客がありました。今では三茶の秋の風物詩といっていると思います」と話す。

また世田谷パブリックシアター内部では、三茶deバラエティ『フィリップマローウの出来事』が上演された。入場料は無料で3回の公演全てが満席となった。この劇自体はやや暗いテーマなのだが、登場するメキシコ人は口々に「アスタ マニャーナ」といって陽気に振る舞う。「いやなことがあっても明日にして、今は陽気にいこう」というような意味の言葉で、今回のイベント全体のテーマでもある。東日本大震災を受けて、あえて選ばれたものだ。

「このイベントは多くの市民がボランティアとして参加し、街がひとつになって運営されています。同じ思いで結束すれば、強い力になるという証明でもあります。被災地もこれから復興に向けてひとつにまとまり、前進して欲しいと願っています」

会場ではチャリティやメッセージフラッグを作成し、被災地への応援も行った。

「街や人を元気にするという文化の役割が今年ほど意識されたことはありません。これからも、この2つのイベントを続けて、社会に貢献していきたいと考えています」

榎屋さんたちは次年度に向けて準備を始めている。